

荒木山通信

2017年12月

創刊号

荒木山の古墳
を顕彰する会

北房の古代が熱い！

北房盆地を俯瞰すると、備中川と中津井川の合流点から、直線距離で高岡神社辺りまでが約五キロ、上皆部の双内橋までが約四キロ、そして、落合境までが約六キロある。

古代、この盆地に生きた人々は、ほぼこの範囲で生活し、多くの生活の跡を残している。その数は約四百三十万所、その内約二百五十万所がお墓（古墳）である。当時古墳を造ったのは有力者たちで、大多数の民衆は近年まで行われていたような木棺の土葬であった。

古墳の中には、この盆地を支配した首長の墓（首長墳）が、十基ほど分かつて

おり、代々一人の首長がこの盆地を支配していたと考えられている。今で言えば、町とか市といったまとまりで、吉備の国を構成する一つの単位であったと考えられている。

幸い、北房地域は、高速道路建設に伴う調査をはじめ、岡山大学による定古墳群の発掘調査まで多くの調査がなされた。そこには、輝いていた北房の古代がある。この「荒木山通信」が、お互いの学びの一助になることを願っています。



来年、平成三十年
（二〇一八年）は、
大谷発掘三十周年
大谷・定古墳群
国史跡指定
十周年

弥生墳丘墓は どうして

どうして

故葛原克人（元岡山県立博物館長）さんは、著書の中で、「北房地域では、そう遠くない将来、弥生墳丘墓が見つかる可能性が高い」と述べている。弥生墳丘墓は、古墳時代に入る前の首長の墓で、特殊壺形土器と特殊器台形土器とよばれる大型で朱塗りの土器を伴っている。近くでは、落合地

荒木山の古墳顕彰会とは？

平成二十八年二月十二日に発足しました。

荒木山東塚は、日本列島で首長墳が前方後円（方）墳という新しい型の墳墓に統一されていくとき、いち早く築かれています。これら初期の古墳は「成立期の古墳」とも呼ばれています。

域西河内の中
山遺跡から出
土し、落合総
合センターへ
展示してある。
上中津井の定
地区に在る

「矢の内遺跡」では、大型で朱塗りの壺や甕に混じって、特殊壺形土器の破片が発見されている。

その事実が発見の手掛かりになるかも知れない。また、上水田の谷尻遺跡では、弥生時代終わり頃の首長の館が発見されている。荒木山東塚はその頃造られたと

続いて西塚が
築かれ、そし
て、そふづぶ

う古墳、立一号墳などの首長墳が連続して築かれています。荒木山の古墳は、北房盆地に古墳時代の幕開けを告げた記念すべき古墳です。本会は、謎とロマンに満ちた貴重な遺跡を守り、そして多くの方々を紹介していきたいと思っています。



特殊器台



荒木山(古墳)の見学会
29年4月

なお、本会の活動は、関係地権者の方々、また地域の皆さんのご理解とご支援無くしては成し得ません。関係各位に心より感謝申し上げます。

どんな活動をしているの？

た。そして、古墳の外周の測量も行っています。

本会では、古墳とその周辺の掃除をしています。二十八年度の三月から四月に三回、十一月に一回、柴掻きや草刈り、雑木の伐採などを行いました。また、町内の史跡巡りや講演会、視察研修にも出掛けて行きました。

二十九年の三月には柴掻きをし、十一月に立木の伐採や掃除を二回行いました。会員研修として、会員の勉強会や真庭市歴史講演会への参加、視察研修などを楽しみながら行ってきました。なお、墳丘の詳細測量を

真庭市に要望し、市から「実施に向けて、前向きに検討したい。」との回答を戴きました。本会としては、引き続き墳丘や周辺の掃除を行い、測量の環境整備を進めていくことにしています。



会員視察研修「四ツ塚古墳」29年10月



墳丘や周辺の清掃活動 29年3月

定古墳群は、蘇我氏一族の墓か？

荒木山の古墳を顕彰する会

代表 久松 秀雄

大谷一号墳と定古墳群の発掘調査により、これらの古墳が西日本でトップクラスの貴重な遺跡であることがわかった。また、その被葬者たちは、当時ヤマト政権の実力者蘇我氏が吉備を併合する際、蘇我氏に協力することにより、急速に力を付けた在地の首長たちだろう。そして、古代の日本が中央集権化に向かう過程

で、吉備国併合という大事に関わったであろう定古墳群の被葬者と北房地域は、古代史を考える上でさらなる研究と評価がなされるであろう。以上が定古墳群について言われている概要である。

ご承知のとおり、大谷・定古墳群は、いずれも七世紀（二部は八世紀とも）に築かれている。つまり、古墳時代（前方後円墳時代）が終わり、飛鳥時代になってからの築造である。その頃には、前方後円（方）墳が築かれなくなり、王族や一部の高位の者のみに方墳の築造が許される状況であった。中央では、蘇我氏がいち早く方墳を築き、天皇陵にも採用させた。ちなみに、蘇我氏の初代・稲目の「都塚古墳」、二代・馬子の「石舞台古墳」は、いずれも大型の方墳である。墓造りが制限される中で、北房の盆地に天皇陵の縮小版とも言われる段構造の方墳が六基

も築かれた。このことをどう理解したらよいのであろうか。これらの方墳に眠る主は何者か、在地の首長たちであろうか。あるいは、蘇我氏の一族ないし直属の豪族が北房に進出し、そして定住したのであろうか。私は後者ではないかと考えている。

が最上位で、次いで前方後方墳であり、大型の前方後円墳である立一号墳から前方後方墳の小田鼻古墳へと首長墳が継承されたこととなる。格下げになったことになる。小田鼻古墳の被葬者

は、大和政権が主導する古墳秩序よりも出雲との関係を重視したのであろうか。このように、出雲と親密な関係にあった小田鼻古墳の首長を蘇我氏が支配下において吉備併合の大事業をな

したとするには、相当の無理があると思われる。そこで、こうは考えられないだろうか。蘇我稲目が実権を握った六世紀中頃、蘇我氏の勢力が北房に進出し、在地の首長と協力して

吉備の首長たちを掌握し、統一国家へ向かう新しい律令制度を浸透させたという仮説である。そして、その一族は北房に定住し、定古墳群に葬られた。蘇我氏の権勢をもつてこそ、西日本

トップクラスの方墳の築造が可能であった。そう考えると、鋤先や斧状鉄製品、金製品など朝鮮半島との交流を示す副葬品も理解がしやすいと思われるが、いかがでしょうか。

古墳文化の宝庫 北房

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問 戸村 彰孝

今朝も緑の大根畑に大霜がおりて年の瀬の近いのを知らせている。幾千年もこうして春夏秋冬を迎えた北房の盆地は、実は古代吉備王国の北部文化圏の遺産を豊富に埋蔵している宝庫である。

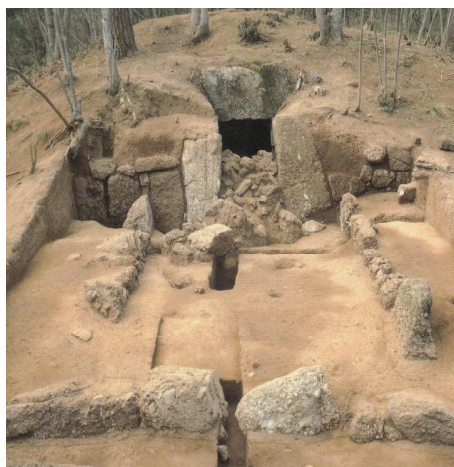
四百の遺跡と二百の古墳の中で貴重な文化遺産の学術的評価がされているのは、定古墳群や大谷一号墳など終末期の一部に限られており、弥生から古墳中期の姿は未解明と云ってもよい。

その状況の中で荒木山東塚古墳は、古墳前期の特徴である前方後方墳で、備前車塚古墳や川東車塚古墳と同時代のものとして注目されてきた。両車塚はいずれも昭和三十年代に発掘調査され、銅鏡などが出土し在地豪族の墓ではないかと推定されている。

この度、荒木山古墳を顕彰する会の発足以来、地道な保護活動が認められ、学術測量に向けて市の検討も進んでおり、古代文化の宝庫の扉を開く大きな第一歩

として会員一同が胸を開く思いで一杯だ。
古墳時代(三〜七世紀)も終末を迎えた時、大谷一号墳は出現した。王族のみに許されるピラミッド型の墳型、副葬品の見事な環頭大刀などから類推すると、大和朝廷が派遣した王族身分の将軍が葬られたに違いないと思う。

六世紀〜七世紀の日本は、朝鮮半島の任那に日本府を設けていたが、新羅や高句麗の侵攻を受け、大軍を送って任那を支援するという、大陸・半島との厳しい軍事・外交問題に直面していた。七世紀を迎えると、日本は半島から撤兵し、新羅攻撃を中止した。聖徳太子は、



発掘時の定北古墳

1995 年、岡大考古学研究室
発行の「定北古墳」から

つまり、七世紀は日本が大和朝廷によって内外に国家としての権威が公認された世紀と云ってもよからう。大和にとつて内憂の種の一つ、吉備・出雲の旧王国の連携を阻止し、政権の安定を図るため、北房の地へ将軍を派遣したのでなかろうか。

三〇年度に向けて

―墳丘測量の 環境整備を―

平成三十年度も、墳丘や周辺の掃除のほか、研修活動などを継続して行います。なお、三十年は大谷一号墳の発掘調査が始まった昭和六十三（一九八八）年から三十年、また「大谷・定古墳群」が国指定史跡に決まった平成二十（二〇〇八）年から十年となる記念すべき年です。本会は、真庭市の記念行事等にも参加・協力し、顕彰活動を盛り上げたいと考えています。



「広報ほくぼう」昭和63年4月号

【役員紹介】

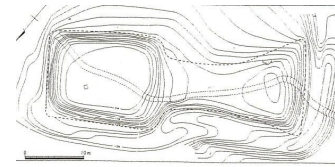
〇代表	久松 秀雄
〇副代表	南條 保之
〇顧問	西谷 寛
〇事務局	戸村 彰孝
〇幹事	奥田 健治
〇監事	天野 光暉
同	山崎 和光
同	大植 昭一
同	川口 與志
同	三浦 明
同	志田 浩一
同	井原 隆志
同	中山 莊司
同	難波 正夫

荒木山を訪ねて(その一)

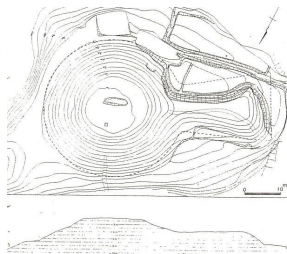
市道の下中津井井尾線（通称南部線）の中段に、住宅団地のグリーンタウンが在る。その山裾に、緑の屋根の老人憩いの家がひっそりと建っている。憩いの家の裏山が荒木山である。工藤家の東側の小道を上る北コースは、途中大理石の案内板の所で二手に分か



丸太の階段



荒木山東塚古墳



荒木山西塚古墳

れている。左にとつてしばらく進むと急な坂道となり、丸太の階段を登り切ると、そこが東塚と西塚との中間



古墳の案内板

である。分かれ道を右に採ると西塚の西の端へと通じている。平野部ととの比高差は約二十メートルで、十分もあれば上ることが出来る。南コースは、常



上った道から見た西塚古墳
(後円部が向こうに見える。)

井池の西側に在る駐車場から集落の中の道を西へ進み、城崎両家の間の小道を上ると比較的楽に東塚と西塚の中間へと上ることが出来る。どちらの古墳も前方部を西南に向けており、中央に立つと東には東塚の前方部の奥に一段高く後円部が望まれる。西を見ると西塚の

堂々たる後円部が見える。東塚には、後円部を主に桧の太木が林立している。西塚には広葉樹の太木があるが本数は僅かである。東塚西塚ともに後世改変を受けているが、古墳の姿をよく止めている。

つづく

《入会のすすめ》

趣旨に賛同し、入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。そして、入会時に年会費三千円を納入下さい。会員へは、当会の活動状況や計画をお知らせするほか、真庭市が開催する歴史関係の講演会などもご案内します。

〇 荒木山の古墳を顕彰する会では、活動のようすや研修したことなどをお知らせするため、年二回程度「荒木山通信」を発行する予定です。